# 天草版平家物語の表記についての基礎的考察

江　口　正　弘

## 0　はじめに　（目次）

「天草版平家物語」ローマ字表記の基本的な面の考察を、次のようにいくつかの項目に分けて考察する。

1　母音ｖとｕ　　2　母音ｉとｙとｊ　　3　翻字者と表記について
4　voとuoについて　　5　助詞uoの分かち書きの問題
6　カ行について　　7　四つ仮名の混同
8　ア段・ウ段及びオ段の長音と開合の乱れについて
9　拗音の表記から　　10　舌内入声音の表記

## 1　母音ｖとｕ

母音音節のウは普通ｖが用いられている。単語として用いるのには、語頭及び複合語の後部構成要素（後項）の最初に用いられるのが普通である。

vqixima（浮島）　vgoqu（動く）　vta（歌）　cocorovsa（心憂さ）　Invchi（院内）

複合語の後項の初めのウもｖが普通である。

cocorovy（心憂い）　vtçuxi　vye（移植ゑ）　coivqe（乞受け）　Yuqinovra（結城浦）

ただまれにｕを用いた例がある。次の５例だけが管見に入っている。

cazauye（風上）p121-24　　Dannoura（壇ノ浦）p342-3，p348-9

Miuranosuqe（三浦介）p342-19，p342-20

なお「壇ノ浦」には１カ所だけ、Dannovra　p405-11　とした例があり、「三浦」にも、Mivra　272-2（地名）や「三浦十郎」Mivrano　Iŭrŏ　（人名）p272-1 と表記している。こうみると、複合語の後項の最初の「ウ」の表記もｖが普通で、ｕは表記の揺れ程度であると考えられる。

ウ段の母音音節、ク・ス・ツ・ヌ…以下の母音には普通ｕが用いられ、ｖは用いられない。ただし森田武氏も指摘されているように「葡語ではｕの大文字は用いず大文

字の場合、vの大文字Vを用いる」(『日葡辞書提要』) ので、次のような例がある。

GVIVO (祇王)　　QENGVEO (検校)　　YASVYORI (康頼)　　など。

またグにgvの例が1例だけある。gvan (愚案) 序3-16 である。元日 (ぐわんじつ) guanjit などの guan との混同を避けてわざわざ gv を用いたものと考えられる。

## 2　母音iとyとj

母音音節イはi, y, jが用いられる。イの語頭には、iとyが用いられる。iは

ita (板)　idaxi (出)　inoxixi (猪)　iriye (入江)

また語中や語末にも、

caixŏ (海上)　qeizzu (系図)　annai (案内)　arigatai (有難い)

のようにもっとも一般的に用いられている。

yはヤ行音にya, yu, yoやエの音にyeが用いられるが、イの音節を表すものでは、語頭、語中、語尾に次のように用いられている。

ychiv (一宇)　ychimon (一門)　vycamuri (初冠)　vguysu (鶯)　iy (言ひ)

vy(憂い)　Qiy (紀伊)　cumoy (雲居)　xucuy (宿意)　xoy (所為)

vguysuはvguisuと綴ると、「うぎす」と読まれるので、vguysuとしたのであろうということは理解できるが、語頭でのiとyの使用基準は余りはっきりしない。例えば「入る・要る」(四段活用、但し複合動詞は除く) では、ira, iru, のようにiを用いたものが、87回あるのに対して、yra, yri, の例は4例だけである。

○Mijdera niua miya no iraxerarete cara, (p123) 三井寺には宮の入らせられてから、(巻二)

○Axicauayama uo vchicoite faccacocu ni yraxerareta naraba, (P151) あしかわ山 (足柄山) をうち越いて八か国に入らせられたならば、(巻二)

また下二段活用の「入る」では、ire, irei などが47例であるのに対して、yreの例は1例だけである。

○Tadanori no vtamo yxxu yrerareta to qicoye maraxita. Cocorozaxi ga fucacatta ni yotte, amata mo iretŏ vomouaretare domo, (P183)

忠度の歌一首入れられたと聞こえまらした。志が深かったによって、あまたも入れたう思はれたれども、(巻三)

この「入る」では ira, iru の表記が原則であったかと考えられる。ただ中に例外があるのは前述のとおりである。

一方「射る」についてみると、i, iru などの例が未然形iが4例、終止形・連体形・

已然形が各１例で合計７例であるのに対して、y, yru, yre, yyo の形が48例ある。この「射る」に関しては、yru の方が本流と考えられる。

また、上一段活用の「居る」では、i, iru, ire としたものが38例であるのに対して、y, yru と表記したものが、そのおよそ倍の74例である。

○vagamiua Iyoni inagara, saqidatete Yaximaye tatematçuttaga, (P331)

我が身は伊予に居ながら、先立てて屋島へ奉ったが、(巻四)

○Yoritomoga ynagara facaricotouo meguraxeba coso, (P355)

頼朝が居ながら謀事をめぐらせばこそ、(巻四)

また、「院」や「院の御所」などの「院」の表記は、すべて In である。ただ建物などの場合は、

Vnrinyn（雲林院） Conye no yn（近衛院） Iacquŏyn（寂光院） Fôrinyn（法輪院）

などや、Tobanoin（鳥羽院） Vŏjŏin（往生院） Biŏdôin, Biŏdôyn （平等院）

のように両方の表記が見える。

j が音節「イ」を表すのは形容詞の語尾の canaxij（悲しい）p100-11, vtomaxij（うとましい）p83-17, coixij（恋しい）p306-4などの「～しい」の場合の「～xij」のように用いるほかは、余り用いられていない。形容詞の語尾以外では、xijca（詩歌）p80-21、xij（四位）p26-18、xijte（しひて）p207-4、namaxijni（なましひに）p106-16、nijde（似いで）p71-22、xijte（敷いて）p358-19など、ij の形で見える。

このように qijte（聞いて）p4-20, p5-16, 19…、majij（まじい）p8-12, p31-12, …など、「イイ」場合 ij の表記が多いのに対して、例外的ではあるが、ii や iy の例がある。

qiite（聞いて）の例は p209-3, p306-21に、maiii（まじい）の例は p390-22 にみえる。また、「三井寺」も Mijdera が大部分であるのに対して、Miydera が目録の p2 に３例あり、打消し接続の助詞、「いで」も ide, jde が普通であるが、「射いで」で次のように iyde となった例もある。ya fitotçu uomo iyde（矢一つをも射いで）p172-16。

## 3　翻字者と表記について

前述のように同じ語の表記に複数の表記の方法がある場合、例えば「居る」の「イ」の音節に y と i の表記がみられるが、その配置によって翻字者が異なるのであろうと推定する説がある。この問題は避けては通れないので、細かく検証してみることにする。

1989年３月、菅原範夫氏の「キリシタン版ローマ字資料の表記と読み――ローマ字翻字者との関係から」（国語学156）の論考が注目される。氏は、

「『天草平家』のローマ字翻字を仮に一人の人物が担当したと考えた場合、複数の表記で分布域が一致していることが偶然であるとは考えられない。（中略）一人の手になる意図的な用法の分布とは考えにくい。（中略）複数の人によって分担翻字されたと考えるのが穏当であろう。一定の用法をしている部分を一人とすると、同内容の部分はないので、四人が翻字に当たったものと考えられる。」

として、（Ⅰ）が冒頭から p114まで、（Ⅱ）が p115から p224まで、（Ⅲ）が p225から p297まで、（Ⅳ）を p298から巻末までとする。そして「行く」「射る」「本意」などの「イ」の表記が並べられている。そこで「居る」「射る」「入る」などの表記を調べてみることにする。

（ア）「ゐる」の表記

次に示したのは、上一段「居る」が使用されているページと行である。5-12は５頁の12行である。7-17のように「文字囲み」をしているのは、i, iru, ire のように「イ」の音節をｉで表記しているもの、囲みのないものは、y, yru, yre とｙで表記しているものである。それを、氏の分類によって、（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ）のように分けて示すと次のようになる。

（Ⅰ）　5-12, 5-14, 7-17, 21-2, 24-13, 27-15, 33-19, 50-21, 56-21, 58-18, 62-17, 66-8, 67-13, 69-20, 73-8, 81-1, 84-4, 85-6, 92-4, 97-2, 98-18, 102-4, 103-4, 103-9, 104-4, 104-7, 107-24, 110-6, 113-19

ｙが10例であるのに対し、ｉは19例である。

（Ⅱ）　116-1, 117-13, 118-17, 118-17, 118-18, 119-19, 110-20, 124-1, 137-22, 140-4, 140-11, 149-13, 153-15, 155-11, 158-8, 158-15, 159-7, 160-13, 165-12, 166-5, 178-5, 178-12, 189-21, 192-5, 197-4, 197-10, 197-18, 199-3, 199-11, 199-18, 200-23, 201-10, 201-13, 204-10, 205-21, 209-1, 210-9, 211-18, 211-22, 212-1, 212-9, 212-18, 215-19, 217-9, 219-6, 224-10,

ここはｙが43例であるのに対して、ｉは３例である。

（Ⅲ）　225-19, 226-15, 227-23, 227-24, 233-2, 241-1, 241-15, 249-3, 249-4, 250-7, 256-7, 262-11, 269-10, 274-18, 274-21,

ここはｙが６例であるのに対してｉは９例である。

（Ⅳ）　281-13, 294-21, 304-10, 307-11, 309-8, 309-17, 313-14, 313-24, 321-2, 323-5, 330-20, 331-17, 332-24, 334-8, 355-7, 355-21, 370-5, 382-20, 385-6, 391-7, 393-11, 397-3

ここはｙが14で、ｉは８例である。

以上「居る」112例の「イ」の音節の表記はy, yru, yreが73例、i, iru, ireが、39例であるが、（Ⅰ）にはi系が多く、（Ⅱ）にはy系が多いとはいえるが、判然と翻字者が異なるといえるような並び方であろうか。まして（Ⅲ）と（Ⅳ）では混然としてその区別を見つけるのも困難な感じである。

（イ）「イチ」の表記と分布

菅原氏は「居る」の分布と並べて、「イチ」と読む語の表記を次のように示している。

「イチの表記におけるi, yの分布は「居る」の分布とは異なる。yが全体に分布していながら、iが部分的に集中している。注目されるのはiが集中している部分で、232ページから293ページではyとほぼ同数である。更には123ページからのiの集中していることに注意しておく必要がある。」と述べている。そしてほぼ次のような表を示してある。

| | 居る | 一（イチ） |
|---|---|---|
| Ⅰ | i使用 | Y使用 |
| Ⅱ | y使用 | y使用（iもやや多） |
| Ⅲ | i使用 | Ⅰ・y併用 |
| Ⅳ | y使用 | y使用 |

そこでこの「イチ」を細かに調べてみることにする。「天草版平家」で「イチ」すなわちichiやychiを語頭に持つ語は、「市・一日・一門・一円」など、異なり語数でおよそ50語、延べ語数で316語ほどある。その中でichiと表記する語数（延べ語数）は67語、ychiとする語は249語である。煩瑣ではあるが、その全体を示すことにする。前記と同じように、そのページと行数を、文字囲をしたものはichi系のもの、囲みのないものはychiとあるものである。

（Ⅰ）　序1-1, 序1-13, 序3-4, 序3-6, 序3-17, 5-9, 8-1, 10-14, 11-14, 12-5, 12-21, 12-24, 13-18, 15-5, 16-1, 16-24, 17-4, 19-3, 22-16, 22-20, 23-4, 23-5, 25-15, 25-23, 27-9, 28-3, 30-5, 33-18, 34-15, 36-1, 38-23, 41-1, 42-17, 42-21, 44-1, 46-6, 46-13, 47-12, 48-17, 50-8, 50-23, 51-7, 53-14, 53-14, 53-17, 54-4, 54-15, 54-18, 56-18, 57-16, 60-21, 61-14, 61-16, 61-21, 64-15, 67-12, 68-19, 72-2, 73-8, 74-14, 75-23, 81-15, 81-17, 83-17, 85-7, 94-15, 96-11, 96-13, 97-1, 97-6, 97-17, 99-16, 101-17, 109-2, 110-12, 113-7, 113-20, 113-22

（Ⅱ）　123-23, 125-5, 127-9, 127-17, 127-23, 128-9, 135-7, 136-8, 136-22, 140-19, 142-3, 144-24, 145-16, 146-5, 150-23, 151-2, 151-17, 153-1, 153-24, 155-12, 155-13,

155-14, 155-14, 157-9, 160-21, 161-19, 164-6, 164-18, 164-18, 167-2, 167-4, 167-8, 167-10, 167-12, 167-14, 170-3, 174-6, 175-7, 175-15, 176-6, 176-9, 176-15, 178-19, 180-12, 181-14, 182-2, 182-12, 184-6, 187-17, 187-21, 187-24, 188-19, 188-22, 189-12, 190-24, 192-5, 192-6, 192-24, 193-10, 193-24, 194-1, 194-7, 195-2, 197-6, 197-20, 198-6, 198-19, 200-9, 201-19, 201-24, 202-7, 203-1, 203-10, 203-11, 207-19, 210-16, 211-22, 213-24, 216-13, 217-19,

(Ⅲ)　225-7, 226-2, 226-21, 232-15, 235-20, 236-18, 239-9, 241-18, 244-12, 244-21, 244-23, 246-9, 247-24, 249-24, 250-2, 250-2, 252-2, 252-9, 253-6, 253-15, 253-15, 254-3, 254-7, 254-16, 254-17, 255-1, 255-7, 255-24, 256-11, 256-13, 256-21, 256-24, 257-8, 257-15, 258-14, 258-16, 258-17, 259-20, 260-6, 261-7, 261-8, 261-18, 262-6, 262-13, 262-22, 267-6, 269-9, 270-18, 270-20, 272-19, 273-4, 274-13, 275-4, 275-19, 275-21, 276-1, 276-3, 276-5, 278-17, 278-22, 278-24, 279-2, 279-4, 280-3, 280-9, 282-3, 283-6, 284-3, 284-19, 285-2, 285-10, 285-12, 286-12, 286-16, 289-3, 289-5, 291-10, 292-2, 292-3, 292-16, 293-7, 293-12, 293-15, 293-23, 293-24, 294-4, 294-18, 295-17, 297-1,

(Ⅳ)　301-2, 301-8, 303-24, 304-1, 304-1, 304-19, 306-5, 307-16, 309-22, 313-9, 314-1, 316-7, 316-18, 322-9, 327-15, 330-7, 332-3, 333-7, 334-19, 336-11, 336-17, 336-24, 337-15, 337-18, 339-4, 340-3, 340-15, 344-20, 346-9, 346-20, 349-22, 351-18, 354-18, 355-22, 359-22, 363-4, 364-3, 364-19, 366-15, 367-13, 369-3, 376-1, 376-12, 376-15, 376-18, 377-22, 378-7, 378-21, 380-15, 384-12, 386-23, 387-4, 387-8, 390-21, 392-21, 394-12, 397-3, 398-10, 400-16, 400-17, 401-8, 401-18, 404-13, 404-24, 406-7, 目3-17, 4-21, 4-25, 5-3

菅原氏が、ichi, ychi を含む語の位置を、前表では、「Ⅰではｙ使用、Ⅱではｙ使用（iもやや多）、Ⅲはｉ・ｙ併用、Ⅳはｙ使用」としているが、具体的に調査してみると、上記のようである。これでもｉ・ｙの使用の分布が翻字者の別を示すとは考えられそうにはない。（Ⅲ）と（Ⅳ）に網掛け（塗りつぶし）をしているものは、「一ノ谷」という語のある場所である。「一ノ谷」は252ページ以下、27回用いられているが、網掛けをした25回は ichi no tani と表記された例である。しかもその表記は（Ⅲ）から（Ⅳ）にわたって用いられている。わずかに ychi no tani と表記したのは、333-7と目録4-21の２カ所だけである。翻字者すなわち人によって書き分けているというより、語によって書き分けていると考える方が妥当ではなかろうか。ただ語による表記の不統一があるから、問題とするのではある。「イチ」を含む語でかなり度数の多い語を取り上げて、

ichi と ychi と表記されている度数を示してみると、次の表１のとおりである。

これを見ると、「一度」では、ichido と表記した例は、32回中３回、「一人」では、ichinin と表記した回数は10回で他の64回は ychinin である。そして「一ノ谷」以外は ychi が多く、しかも ichi がその特定の語以外は（Ⅰ）から（Ⅳ）までのうちの複数に分布している。ここで ichi と ychi の表記の分布から翻字者を区別することは、かなり難しいと考えられる。

表１　ichi と ychi を含む語の度数分布表

| | （Ⅰ） | | （Ⅱ） | | （Ⅲ） | | （Ⅳ） | | 度数計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ichi | ychi | ichi | ychi | ichi | ychi | ichi | ychi | |
| 一度 | 0 | 10 | 0 | 5 | 2 | 7 | 1 | 7 | 32 |
| 一日 | 0 | 0 | 1 | 3 | 1 | 4 | 0 | 1 | 10 |
| 一人 | 2 | 23 | 4 | 11 | 4 | 10 | 0 | 20 | 74 |
| 一ノ谷 | 0 | 0 | 0 | 0 | 23 | 0 | 2 | 2 | 27 |
| 一門 | 1 | 17 | 0 | 13 | 3 | 9 | 0 | 12 | 55 |

（ウ）「射る」の表記

次に同じ「イル」であるが、「射る」の表記を並べてみる。

（Ⅰ）　43-6,

（Ⅱ）　126-4, 126-10, 127-2, 130-11, 130-13, 132-4, 132-5, 132-15, 135-1, 139-16, 142-12, 151-16, 154-6, 163-1, 166-16, 169-21, 169-23, 172-16, 209-21, 212-17, 213-16, 216-5, 223-3,

（Ⅲ）　236-2, 236-3, 247-14, 247-18, 247-20, 248-4, 256-5, 265-6, 265-9, 265-11, 266-17, 269-4, 269-11, 271-3,

（Ⅳ）　313-1, 328-12, 333-9 333-10, 333-24, 335-2, 335-16, 335-20, 335-21, 336-3, 337-21, 345-13, 345-14, 377-13, 381-18, 目2-20, 目5-15

43-6のように文字囲をしたものが、i, iru, ire, と表記したもので、文字囲のないものが、y, yru, yre, yyo と表記したものである。全用例55例のうち、i 系は７例だけで、他の48例は y 系である。この羅列から翻字者の相違を推定するには不十分であろう。

（エ）「入る・要る」（四段）と「入る」（下二段）及び「命」の「イ」の表記

同じ「イル」に「入る」の四段活用と下二段活用がある。四段活用の「入る・要る」

は用例が91例あるが、そのうちの87例は、ira, iri のiを用いたもので、yra, yru とyを用いた例は4例だけである。また下二段活用の「入る」は、48例中、47例が ire と i を用いていて、yre の例はただ1例である。

また「いのち」という語は「お命・おん命」を含めて105回用いられているが、すべて inochi と書かれていて、ynochi と表記した例はない。また「いかに・いかなる」という語は icani icanaru とあり、ycani ycanaru という例はない。一方国名の「伊賀」は5例とも Yga (131-10, 233-20, 404-14, 17, 405-23) で Iga の例はない。

こうみると、iとyの表記の違いは一概に翻字者の違いとだけは言えないし、また上記の「居る」や「イチ」の表記のiとyの分布の変化が翻字者の変化を示すとは考えにくいし、(Ⅰ)～(Ⅳ)の分布の状態が確実にその境を示していないのも上記のとおりである。

## 4　vo と uo について

ワ行の子音は語頭では v、語中では u、というのは、早く橋本進吉氏が『キリシタン教義の研究』に説いているとおりである。 また、v. u. vo. uo のポルトガル語との関係については氏の外にも森田武氏が、『天草版平家物語難語句解の研究』『日葡辞書提要』などで説明されている。従ってここでは、これら説かれてきたことを、天草版平家物語のローマ字本文の表記によって確認してみることにする。

(1)　語頭に vo、語中 uo について

このことは一応語頭が vo, 語中に uo　が用いられているといえる。従って助詞「を」は、vomotte「をもって」の「を」以外は uo であり、接頭語「お」「おん」をはじめ、歴史的表記で、「お」又は「を」で始まる語は vo と表記している。

vocu (奥・奥州・置く)　voqi (沖)　Voqino cuni (隠岐国)　voto (音)
Vogurayama (小倉山)　voximu (惜しむ)　vouaru (終る)

語中では uo である。ハ行転呼音による「～ほ」などすべて～uo と表記されている。

auoba (青葉)　vomeuometo (おめおめと)　quanuon (観音(くわんおん))　xenouo (瀬尾)
cauo (顔)　xiuo (潮)　fonouo (炎)　moyouoxi (もよほし)　yosouoi (よそほひ)

(2)「をもって」の場合は、vomotte の表記である。

助詞「を」は、uo と表記するのが普通であるが、「をもって」の場合は、vomotte と、「を」は vo と表記している。

nanno ycon vomotte cono ychimon uo forobosŏ zuru tono cuuatate ua nanigotozo?(p28-3)
何の遺恨をもってこの一門を亡さうずるとの企ては何事ぞ？ (巻一)

govon vomotte cubi uo tçugare mairaxete, (p31-3) 御恩をもって首をつがれ参らせて、(巻一)

Miyaco no foca ye idasaxeraruru vomotte, coto ua taru coto de gozaru. (p31-21) 都のほかへいださせらるるをもって、事は足ることでござる。(巻一)

以下、p38-12, p40-18. 22. p52-18 … というように、この vomotte の例は多くある。ただ uomotte の例が1例だけ管見に入っている。

Sonotoqi tetareuomotte y votosŏzuru tono guide gozaruca, (p335-19)

その時手たれをもって射落さうずるとの儀でござるか、(巻四)

この場合 tetare の次には切れ目なくそのまま続けている。

vomotte については、『日葡辞書』でも、Vomotte. の項目を立て「これは奪格のプロポジサンである」として以下細かく説明している。

**(3) 複合語の後部構成要素の頭の場合は vo が普通である。**

一語の中でも複合語の場合は、

acuxovotoxi (悪所落とし)　azzumavotoco (東男)　vchivocuru (打送る)

vmarevochi (生れ落ち)　vchivodorocasu (打驚かす)

のように複合語の後部構成要素の最初が「オ」の場合は、語中でも vo を用いるのが普通である。ただまれには混同した例もみえる。

以下同じ語に vo と uo の両表記があるものをみることにする。

(ア)　d a i v o n／d a i u o n／d a i uõ (大音)

○ daivonuo aguete nanorareta : (p244-19) 大音をあげて名のられた。(巻四)

○ tacayagura cara daiuonuo aguete nonoxitte : (p213-11) 高矢倉から大音をあげてののしって (巻三)

○daiuõ uo aguete nanoruua : (p126-19) 大音をあげて名のるは (巻二)

『日葡辞書』には Daiuon として示されている。

(イ) g i ŭ v o n／g i ŭ u o n (重恩)

c hôv o n／c hôu o n (朝恩)

「重恩」は p188-15, p192-19, p194-9, p202-19 の4回用いられているが、最初だけが、giŭuon であとの3例は giŭvon とある。

また「朝恩」は chôuon が p18-22, と p45-21 の2例で、chôvon が p46-8, p48-9, と p197-23 の3例である。p45-21と p46-8 とは10行程度しか離れていないのに、表記が異なっている点注意される。なお、「四恩」という語が p45-18に用いられているが、これは xivon とある。すなわち p45-18 xivon, があり、p45-21に chôuon, があり、p46-8

には、chôvon と並ぶことになる。

（ウ）　ｃｕｃｈｉｖｏｘｉｊ／ｃｕｃｈｉｕｏｘｉｊ（くちをしい）

「くちをしい」という語の終止形と連体形に cuchivoxij という表記のものと、cuchiuoxij とする表記がある。

cuchivoxij が、p245-14, p382-7 に２例だけあり、cuchiuoxij が p150-23, p183-13, p191-17, p268-7, p314-13, p319-5, p360-21, p362-2 に８例ある。

（エ）　ｖｏｔｏｖｏｔｏ／ｖｏｔｏｕｏｔｏ／ｖｏｔｏｔｏ（おとうと）

「弟」には votovoto, votouoto, vototo の表記がある。全用例の位置をページと行で前と同じように示す。

35-14, 202-17, 210-21, (211-13), 225-14, 250-5, 250-9, 257-23, 267-23, 269-13, 284-9 この11例のなかで、文字囲（数字囲）をしているものは、votovoto とあるもの、（　）に入れている例は、vototo と表記したもので、他は votouoto と表記したものである。ただ202-17の例は印刷が不鮮明であるが、votouoto であろうと判読したものである。p210から p225まであたりが、votouoto でないことになる。

## 5　助詞 uo の分かち書きの問題

助詞の uo は次の（A）のように分かち書きのものと、（B）のように前の語に続けたものとがあって、（A）は巻頭から大体 P206までに多く、P207から P219までは（A）（B）両者が混ざっているが、P220から巻末までは殆ど（B）の形式になっている。

（A）　Sanmi nhŭdŏ ua fachijŭ ni natte icusa uo xite migui no fizaguchi uo ysaxete, (p132-5) 三位入道は八十になって軍をして右の膝口を射させて（巻二）

（B）　mada fitotabimo teqini vxirouo mixeneba, teivŏde gozarŏ tomo mamayo, cabutouo nugui, yuzzuruuo fazzuite, (p220-14) まだ一度も敵に後を見せねば、帝王でござらうともままよ、甲を脱ぎ、弓弦をはづいて（巻三）

この問題を少し詳しく見ていくことにする。冒頭の扉を除いてハビアンが記した序文の３頁には、（A）のように分かち書きが５例で、（B）の形は44例である。それ以後本文のｐ３から p206までは大部分が（A）形式で、およそ2100例あり、その中の（B）形式の例は、40-7, 44-11, 61-13, 116-21, 118-8, 120-11, 153-13 にある例ぐらいである。続いて p207から p219までの13頁は、次のとおりである。前後４頁を含めて表示する。但し行頭の uo は特に数えない。

| ページ | 205 | 206 | 207 | 208 | 209 | 210 | 211 | 212 | 213 | 214 | 215 | 216 | 217 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Aの数 | 11 | 9 | 2 | 3 | 7 | 2 | 1 | 9 | 1 | 4 | 3 | 3 | 2 |
| Bの数 | 0 | 0 | 10 | 1 | 8 | 6 | 9 | 9 | 11 | 9 | 4 | 11 | 12 |

| ページ | 218 | 219 | 220 | 221 |
|---|---|---|---|---|
| Aの数 | 0 | 4 | 0 | 0 |
| Bの数 | 8 | 8 | 13 | 10 |

p205, 206ではBの数は0, 0であるが、p207からp219までは大体表示のとおりで、Aが41回、Bは106回である。そしてp220, 221ではAの数は0, 0でBが13回と10回である。

p220以下では約1700例あるなかで、B形式が大部分で、分かち書きのA形式は、277-13, 280-15, 289-16, 291-8, 298-10, 304-20, 306-24, 395-8 の例ぐらいである。狭い間隔での表記で、中には微妙な例もあるが、大体以上のとおりである。

このような分かち書きの問題は他の助詞にも見られるようであるが、uo 以外の精査はしていないので、前半と後半の和歌の表記から、その違いだけを示すことにする。

①Vmoregui no fana saqu coto mo nacarixi ni,

Mi no naru fate zo canaxicariqeru. (p133-6)

埋もれ木の花咲くこともなかりしに、みのなる果てぞかなしかりける（巻二）

②Noborubeqi tayori naqi mi ua co no moto ni,

Xiy uo firoite yo uo vataru cana. (p140-14)

のぼるべきたよりなき身は木のもとに、しひを拾ひて世をわたるかな（巻二）

①の歌は14句に分け、②は16句に分かち書きしている。これに対し後半の歌は、

③Sorumadeua vramixicadomo, azzusayumi,

Macotono michini yruzo vrexiqi. (p309-2)

そるまでは恨みしかども、梓弓、まことの道に入るぞうれしき（巻四）

④Sorutotemo nanica vramin azzusayumi,

Fiqitodomubeqi cocoro naraneba. (p309-5)

そるとても何か恨みん梓弓、ひきとどむべき心ならねば（巻四）

③と④はともに、7句に分けている。これらの表記から前半と、後半には分かち書きの方法に違いがあると考えられる。この現象が翻字者とどうかかわるかについては、いまは問題にしないことにして、ただこの現象を報告するにとどめたい。

## 6　カ行について

カ行は、ca・qi・cu, qu・qe・co

と表記している。「カ」は ca 以外はみえない。ポルトガル語では、q は必ず u を伴って母音 a, e, i, o, と結合するというが、「キ・ケ」はその省略形とされる qi・qe だけで、『キリシタン教義の研究』に示されているような qui・que の例はみえない。

「ク」は本書では cu または qu で、cu が多く用いられている。

amacusa（天草），acumiõ（悪名），acuguiõ（悪行）など大体単語単位で異なり語数を数えてみると、738語ほどを数えた。また延べ字数で調べてみると、次の表のとおりである。比較のために qu の度数と並べて表示することにする。

表２　cu と qu と表記した延べ回数

| | 序 | 巻一 | 巻二 | 巻三 | 巻四 | 目録 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| cu の延べ字数 | 1 | 463 | 318 | 465 | 1295 | 38 | 2580 |
| qu の延べ字数 | 8 | 118 | 61 | 87 | 261 | 9 | 544 |

cu は、次に述べるように動詞語尾などに偏って用いられている qu に比べて、使用回数も多くて、全例を示すことは困難であるので、qu と表記されている語を示し、その語が～cu と表記した例があるかどうかという点から見ていくことにする。

次の語は qu を含む語である。ただし（A）と（B）に分け、（A）の分類に入れた語は qu の表記だけで cu としたものがない語で、（B）は qu の表記と cu の表記を持つものである。

（A）　qu の表記だけで、cu の表記がないもの

1　aqu　2　aquru　3　aqurutoxi　4　cacayaqu（輝）
5　caqu（書・掻）　6　caquru（掛・駆）　7　catajiqenaqu　8　chicazzuqu
9　chirixiqu　10　cocorozzuyoqu　11　coguiyuqu　12　coixiqu
13　cudaqu　14　facanaqu　15　fayaqu　16　fibiqu　17　fiqicaquru
18　fiqicazzuqu　19　fiqixirizoqu　20　fiqu　21　firaqu　22　fuqeyuqu
23　fuqiquru　24　fuqu　25　fuquru　26　gotoqu　27　gotoquna
28　idequru　29　iqu（行）　30　manequ　31　michiquru（満来）
32　migaqu　33　miqiqu　34　muquru　35　nabiqu　36　naguequ
37　naqunaqu　38　naqu（泣・鳴）　39　naqu（無）　40　nariyuqu
41　noboritçuqu　42　qiqu　43　quru　44　sacamaqu　45　saqu（咲）
46　sasayaqu　47　somuqu　48　sudaqu　49　tachiquru　50　tadayoiaruqu

51 tçuqitçuranuqu　52 tçuqu（突）　53 tçuquru（尽）　54 tçuranuqu
55 tçuyoqu　56 tçuzzuqu　57 toiquru　58 vaqu（分）　59 vchitataqu
60 vchicaquru（駆・掛）　61 vgoqu　62 vochiyuqu　63 voicaquru
64 vomoicaquru　65 vomomuqu　66 vonajiqu　67 voqu（置）
68 vouoqu（多）　69 voxiqu（惜）　70 voyuquye　71 vqu（受）
72 xemequru　73 xicarubequ　74 xiqu（如）　75 xitagai tçuqu
76 yasuqu　77 yoqu　78 yoquyoqu　79 yoritçuqu　80 youaqu
81 yuqu　82 yuqusuye　83 yuquye

以上 qu とだけ表記して cu とつづる表記がない語83例をみると、

①動詞の語尾　aqu（飽く），aquru（明くる），caqu（書く）など、

②形容詞又は形容詞型の語の語尾　coixiqu（恋しく），facanaqu（はかなく）、xiqu（如く）、xicarubequ（然るべく）など、

③動詞語尾を含んだ複合名詞　yuqusuye（行く末），yuquye（行方）

④動詞や形容詞から派生した副詞

naqunaqu（泣く泣く），yoquyoqu（よくよく）など、

のように分類することができる。③を①に含めて動詞語尾とし、④も動詞と形容詞の繰り返しと理解すると、この qu と表記されているのは、動詞の語尾の「く」と形容詞の連用形の語尾の「く」の表記に用いられていると纏めることができる。そして上記の語については、qu に代わって cu の表記は用いられていない。

ところが、同じ語で qu，cu の両表記を持つ語がある。これは語数はそう多くないから細かに見ていくことにする。

（B）同じ語で qu と cu の両方の表記を持つ語

（1）ｆｕｃａｑｕ／ｆｕｃａｃｕ（不覚）

「不覚」は名詞で、前記のような動詞語尾、形容詞語尾にあたらないので、cu であろうと思われるが、次のように fucaqu の例が２例だけある。

○fucaqu no namida ga saqidatte（p171-22）不覚の涙が先立って（巻三）

○fucaquno namidaga vosayegataito（p318-16）不覚の涙が押さへがたいと（巻四）

ただ「不覚」の形が他に５例（155-8, 16, 246-24, 263-12, 273-5）、「不覚人」が１例（394-9）、「不覚す」（235-13）「不覚で」（269-24）がおのおの１例、合計８例あるが、これらはすべて fucacu の形である。ちなみに『日葡辞書』は「不覚・不覚悟・不覚人・不覚な」の項目があるが、すべて Fucacu とある。

（2）ｍａｔｔａｑｕ／ｍａｔｔａｃｕ（全く）

「全く」は mattaqu が３例、mattacu が８例ある。本文中には「全からず」「全い」の形容詞の用例も見えるが、mattacu の例の方が多い。mattaqu の３例は、

○mattaqu xexxa ga zonjite no gui deua gozanai. (p8-17) 全く拙者が存じての儀ではござない。(巻一)

○mattaqu sayŏ no guiua gozanai. (p28-9) 全くさやうの儀はござない。(巻一)

○mattaqu sono gui daua gozanai. (p32-7) 全くその儀ではござない。(巻一)

他の mattacu は、序3-12, 153-21, 294-19, 308-15, 338-13, 361-16, 375-22, 379-4 の８例である。巻一の例だけが mattaqu で、他は mattacu である。

（３）ｑｕｓａｚｕｒｉ／ｃｕｓａｚｕｒｉ（草摺）

「草摺り」は５回用いられているが、１例だけが qusazuri で、他の４例は cusazuri と表記している。

○yoroi no sode, qusazuri ni toritçuite (p185-22) 鎧の袖、草摺りに取りついて（巻三）

他の４例は170-19, 214-22, 275-13, 345-18に用いられていて、cusazuri と表記されている。cusazuri が普通だったかと思われるが、１例だけ qusazuri が用いられている。「草」と関係する語は「草・草飼・草飼水・草木・草の陰・青草・浮草・千草」などの語が用いられているが、これらはすべて cusa で、qusa とした例はない。『日葡辞書』も cusa とある。

（４）ｔａｑｕ／ｔａｃｕ（焚く・焼く）

「焚く」にあたる語に taqu, と tacu の表記がある。

○touobiuo taqu coto fareta tenno foxino gotoquni (p257-19) 遠火をたくこと晴れた天の星のごとくに（巻四）

○ama no tacumono yŭbe no qemuri (p195-15) 海士のたく藻の夕べの煙（巻三）

後者は「焚く藻」としてのまとまった語ではあろうが、もともと「焚く」は動詞であるから、前者のように taqu が普通かと思われるが、このような taqu と tacu の例が１例ずつある。ただ『日葡辞書』は、「Tacumo, I, taqumo タクモまたはタクモ」として、両方を示している。

（５）ｑｕｒｕ／ｃｕｒｕ（来る）

「来る」という語には quru という表記が多いが、curu という表記が３例だけある。まず quru の例、

○asobimono ua fito no mexi ni xitagŏte coso quru mono nare, (p95-5)
遊び者は人の召しに従うてこそ来るものなれ、(巻二)

次に curu の例、

○mucŏte curu ya uoba naguinata de qitte votosu ni yotte, (p126-11)

向うてくる矢をば長刀で切って落とすによって、(巻二)

「くる」(quru, curu) という語は複合語を除くと、次のページと行にある。

95-5, 126-11, 171-1, 209-8, 231-22, 232-14, (234-24,) 239-5, 245-20, 246-16, 267-7, 274-22, 276-7, 373-19, 396-24

curu と表記した例は数字を囲んだ3例である。この一連であることに注意すると、( ) を付した234-24の例は底本の印刷の q と c の識別が難しいが、一応 q と判読したものである。

(C) 同音で qu と cu に書き分けた語

次に同音で qu と cu に書き分けている語についてみよう。たとえば「尽くる」は tçuguru と表記されているが、「作る」「付くる」は tçucuru とされている。例示してみると、

○Fiŏrŏ ga tçugureba, tasacu uo cari vosamete yoxe, (p152-1) 兵粮が尽くれば、田作を刈り収めて寄せ、(巻二)

○voxiyoxete, toqiuo tçucure domo, (p153-13) 押し寄せて関を作れども (巻二)

○Morino jiua iyeno jinareba, Rocudaini tçucuru : (313-16) 盛の字は家の字なれば、六代に付くる。(巻四)

のようである。同じような例を調べると、「解く」は toqu とあるが、「疾く」「徳」「利くす」は tocu とある。「徳」は名詞であるから、cu を用いることは前述のとおりとしても、あとの2例は形容詞の語尾又は動詞としての用法である。例示すると、

○funeno tomozzunauo toquni, (p326-2) 舟の纜を解くに、(巻四)

○yo nonaca uo, tocu sutezarixi coto zo cuyaxiqi (p65-10) 世の中を、とく捨てざりしことぞくやしき (巻一)

○yono tocuno tame, (p 序1-6) 世の徳のため (序)

○côxŏno cauocuuo tçucuranto fossuruniua, mazzu sono vtçuuamonouo tocuxi, (p 序2-13) 工匠の家屋を造らんと欲するには、まづその器物を利くし、(序)

さらに同音語の「オク」では、「置く」は voqu、「奥」は vocu で、「サク」では「咲く」は saqu、「柵」は sacu であることは、前記の原則どおりで問題はないが、動詞の「送る」「遅るる」は vocuru, vocururu とある。

動詞語尾は qu が多く用いられていて、むしろ是が原則だとすれば、上記の「作れ」tçucure、「付くる」tçucuru や「送る」vocuru, 「遅るる」vocururu のように、動詞の語尾の一部などに cu がどう表れているかを検討しておく必要がある。その結果はカ行四

段活用で「～cu」となっているのは前記の「海士の焚く藻」の１例だけで他はすべて「～qu」である。カ行の二段活用の語尾を調べてみると、

tçuquru（尽くる）・mŏxi vquru（申し受くる）・aquru（明くる）・fuquru（更くる）caquru（駆くる・掛くる）・fiqi caquru（引掛くる）・muquru（向くる）・vaquru（分くる）・tçuqure（尽くれ）・aqure（明くれ）caqure（掛、駆くれ） voicaqure（追掛くれ）・vchicaqure（打掛くれ）

などすべて～quru, ～qure であって、～curu, ～cure の形はないが、前述のように tçucuru（付くる）・tçucuru（作る）のほか、mivocuru（見送る）・vocururu（遅るる）・vocuru（送る）・cacurete（隠れ〈て〉）などは動詞の語幹や語尾の一部に、その他 miyamagacure（深山隠れ）・ximagacure（島隠れ）・cogacure（木隠れ）などに cu が用いられている。

## 7 四つ仮名の混同

他のキリシタン資料と同じように、サ行は sa, xi, su, xe, so, ザ行は za, ji, zu, je, zo, タ行は ta, chi, tçu, te, to、ダ行は da, gi, zzu, de, do である。すなわち、「じ」は ji,「ぢ」は gi、「ず」は zu、「づ」は zzu で表記するのが普通である。

こじらう（小次郎）Cojirŏ 261-15, 16, 19・じがい（自害）jigai 103-3, 112-3, 132-6・じたい（辞退）jitai 256-16, 391-13・のじり（野尻）Nojiri 202-18, 203-4・うぢはし（宇治橋）vgifaxi 124-4, 230-1・おぢゃる vogiaru 207-1, 343-12・かぢはら（梶原）Cagiuara 228-8, 232-4, 6・なんぢ（汝）nangi 17-24, 42-14

かず（数）cazu 231-13, 252-18 ・じゃうず（上手）jŏzu 93-18, 94-15・すずり（硯）suzuri 92-7, 295-8・はず（弭）fazu 131-22, 222-10

かづら（葛）cazzura 195-10, 396-23 ・くづるる（崩るる）cuzzururu 176-14, 366-16

てづか（手塚）Tezzuca 170-12,13・みづ（水）mizzu 45-23, 64-20

のようにある。しかし、この四つ仮名はしばしば混同して用いられている。以下本書における、その四つ仮名の混同した例を示す。

（A）ji とあるべきところを gi と表記した例

せうじき（小食）xôgiqi 207-4　　たじま（但馬）Tagima 4-13, 124-5, 126-4

たじろ（田代）Tagiro 254-24

「せうじき」は『日葡辞書』には「Xôjiqi（小食）食べることの少ないこと」とある。「但馬」は人名・地名、全用例６例とも Tagima とある。「田代」も固有名詞、p254-24 に Tagirono quanja（田代の冠者）とあり、６行後ろに同一人物を Tajirodono（田代殿）

と ji を用いている。「田代」の例はこの２例で、Tagiro と Tajiro と表記がある。

（B）gi とあるべきところを ji と表記した例

あかぢ（赤地）acaji 42-5、他の４例は acagi 128-19, 147-21, 240-16, 244-17 とある。

いんぢ（印地）inji 220-2、「印地」の例はこの１例だけ。『日葡辞書』は Ingi とある。

森田武著『天草版平家物語難語句解の研究』にも「いんじ」の項に「Feiqe 本文の四つ仮名の混同による誤り」と指摘している。

きうぢ（灸治）qiŭji 376-23「灸治」はこの１例だけ。『日葡辞書』は Qiŭgi とあり、「やいと、または焼火、灸」と説明している。

しゃうぢ（正治）Xŏji guannen 407-15、「正治」の例もこの１例だけ。

そうぢゐん（総持院）Sôjiyn 178-11, 191-21 原拠本と考えられている『百二十句本平家物語』（慶応義塾大学斯道文庫編・巻七・六十八句）には「総持院」とある。「持」は「ぢ」すなわち gi であるはずである。

ぢしょう（治承）Iixô 234-17, 318-3, 349-19 ３例とも左のようにある。Gixô とあるべきところであるが、そう表記した例はない。

ぢゅうりょ（住侶）Iŭrio 序2-26 の例が１例ある。「住」は「ぢゅう」であるから、giŭrio とあるべきところである。『日葡辞書』には「住居」は Giŭqio とある。

のぢ（野路）は地名である。Noji と、233-16, 390-9に２例ある。Nogi とあるべきところであるが、そう表記した例はない。

ふぢと（藤戸）Fujito 324-11 地名であるが、前記「百二十句本」の第百句に「藤戸とある地名と考えられる。「藤」ならば、「ふぢ」すなわち、Fugito とあるべきところである。

ぶんぢ（文治）Bunji 372-16, 381-19, 394-22, 403-14 とある年号「文治」は４例とも Bunji とある。

へいぢ（平治）は Feiji と記すもの、27-24, 31-2, 37-22, 312-23 のほか４例。Feigi と記すもの、39-7, 230-15, 16, 332-19 の４例。

もくらんぢ（木蘭地）mocuranji 42-11, 291-16

ゐんぢゅう（院中）混同した Injŭ 26-7, 36-19, と長音表記が落ちた Inju 21-19 と、あわせて３例あり、正しい表記の Ingiŭ の表記も47-12, 48-1 に２例ある。

（C）zu とあるべきところを zzu と表記した例

いけずき（生食）iqezzuqi 228-8, 230-3, 4, 6, 9, 21, 231-19, 22, 23 このほか５例、すべて iqezzuqi とある。

くず（葛）cuzzu 195-10, 251-11, 300-4３例すべて cuzzu とある。

はず(弭)fazzu 17-15, 186-7 全用例４例中左の２例が fazzu で他の２例は fazu131-22, 222-10 と表記されている。

ひきずる（引き摺る）fiqizzuru 全用例３例が左のように表記されている。『日葡辞書』は Fiqizuri, ru, utta. とある。

（D）zzu とあるべきところを zu と表記した例

いづ（伊豆）Izu 301-12、「伊豆」には yzzu, Izzu など他に11例あるが、左の１例だけ Izu とある。

きづがわ（木津川）qizugaua 135-23 この１例だけであるが、表記が誤っている。

しづむ（沈む）xizumuru 46-14、他の例は四段、下二段の例ともに xizzum- とあるのに対してこの１例だけ xizumu とある。

しのびづま（しのび妻） xinobizuma 353-22 「忍び妻」の例はこの１例。『日葡辞書』には Xinobizzuma. とある。

すみづ（角水）sumizu 208-12とあるが、『日葡辞書』には Sumizzu とある。

ひきかづく fiqi cazuite 184-16「引きかづく」は全用例４例あるが、左の１例だけが、fiqi cazuite とある。他は fiqi cazzuite 82-2, 323-5 や fiqicazzuqu 130-10 のようにある。

みづ（水） mizu 214-21 他の40例程度は mizzu とあるが、左の例だけが mizu とある。

みやづかひ（宮仕ひ）miyazucai 90-9 とある。他の４例は miyazzucai 89-6, 302-18, 312-18 或いは miazzucai 314-15 とある。

むろづみ（室積）Murozumi 65-5「室積」は地名。例はこれ１例である。

## 8　ア段・ウ段及びオ段の長音と開合の乱れについて

ア段長音を表したと思われるものに、Hà 284-24、Hâ 299-20 の（ハぁ）や、yà の（やぁ）151-7, 232-20・àra の（あぁら）152-21・gozàru 6-24, 31-12の（ござぁる）などがある。このàやâはア段の長音を写したものと思われる。

ウ段長音は xŭjŭ 161-5, 194-4 の（主従）や、xŭjit 14-20の（終日）、qiŭxŭ 157-21（九州），chŭxin 157-22（注進）のように、ŭ が用いられている。

オ段長音は開音はŏを、合音はô で表記していることは周知のとおりである。まず開音の表記から示す。

○かうみゃう（高名）cŏmiŏ 139-17, ○さうはう（双方）sŏfŏ 169-9,

○たうじ（当時）tŏji 21-3, ○まうけ（設）mŏqe 328-10, ○ばう（坊）bŏ 3-9

次に合音表記は、

○こうくわい（後悔）côquai　84-14,　○そうもん（惣門）sômon　332-5,

○とうごく（東国）tôgocu　147-17,　○ほうこう（奉公）fôcô　43-7

のように表記するのが正常な表記で普通であるが、中には混同した例もみえる。その混同した例を示す。

（A）開音を合音に誤って表記した例、

○あふせ（逢瀬）vôxe 289-14, 296-18,　○ごさう（五艘）gosô 327-21

○さんざう（三艘）sanzô 272-20, この「艘」は数字が替わっても間違った例がある。

○じふごぢゃう（十五丈）jŭgogiô 260-11, ○さんじふぢゃう（三十丈）sanjŭgiô 260-11, 「丈」は数字が異なって他に混同した例もある。○しゃうざん（商山）xôzan310-10,

○しょぎゃう（所行）xoguiô 294-18　○ちゃう（庁）chô 380-16,

○にちゃう（二町）nichô 271-20, ただし, nichŏ と正しく表記した例（328-20）も１例ある。

○はうしん（芳心）fôxin 321-15　○はうだて（方立）fôdate 167-5,

（B）合音を開音に表記している例、

○きほう（競）【人名】Qiuŏ 115-5, 117-19, 21 他の14例もすべて開音に表記している。　○じゃうめう（浄妙）Iŏmiŏ 127-18, 20, 21, 23, 128-22,

○しゅんくわんそうづ（俊寛僧都）Xunquan sŏzzu 60-3, 65-3, 74-9, 92-16「俊寛僧都」の「そうづ」はすべて開音に表記している。ただし「僧」は８例あるが、すべて sô と合音で表記している。 ○しょうにん(証人)xŏnin 22-11 とある。但し xônin 268-6 と正しい表記の例もある。

○だいけうくわん（大叫喚）dai qiŏquan 401-11, ○とうせん（闘戦）tŏxen 400-23

○ふせう（不肖）fuxŏ 274-12, ○ほうえん（保延）【年号】fŏyen 26-15,

○ほうげん（保元）fŏguen 39-7, 但し、37-22, 42-14, 139-22, 178-2, 230-15 には Fôguen と正しく表記している。

○ほうでう（北条）Fôjŏ 379-7, 8, 22のほか、28例はすべて同じように「でう」の表記を開音にしている。

○ようか【副詞】yŏca 207-23, ○りょうがん（龍顔）riŏgan 344-8

○補助動詞「まらす」の未然形「まらせ」は「まらせう・まらせうず」と多数用いられているが、１例だけ maraxŏ 48-15 と誤った例がある。

以上は開音と合音との混同した例である。

## 9　拗音の表記から

拗音表記をすべて並べる余裕はないので、拗音表記に複数の形がある「キョ」・「リャ」「リョ」の表記から考察する。

（キョ）qio と qeo

多くは qio が用いられている。qiocu,（曲）19-24・ xiqio（死去）83-8・qionen（去年）144-16・qiogiŭ（居住）172-22・qioyô（許容）176-24 のほか、「皇居・秘曲・免許」などに用いられている。qeo の例は、goqeoyô（御許容）286-2 の１例だけがある。

（リャ）ria と rea

多くは ria が用いられている。riacuxite（略して）335-5・tairiacu（大略）168-9・Guenriacu（元暦）324-23・voriarŏzu（おりゃらうず）26-22・soriacu（粗略）181-24 など。rea の例は soreacu（粗略）19-1, の１例がみえる。

（リョ）rio と reo

多くは rio が用いられている。jŭrio（住侶）序2-26・riojin（旅人）81-16・cŏriocu（合力）121-9・furio（不慮）4-22・xirio（思慮）115-16・riô（龍）367-3 など。reo の例が２例だけ見える。yeireo（叡慮）48-7・reô（龍）344-10 とある。

## 10　舌内入声音の表記

漢字音の入声音のうち、喉内の～ k と唇内音の～ p は早く開音節化して、キ、クやフとなったが、舌内入声の～ t は、原音を保った形で、キリシタンのローマ字表記ではそれを～ t で写していることは、国語史で説かれているところである。そこで本作品中でその例を考察することにする。以下～ t の形のものを数例列挙すると、

gocot（御骨）, cotgainin（乞丐人）, cotjiqi（乞食）, qetguan（結願）, xetgai（殺害）, xetna（刹那）, xetnari（切）, taixet（大切）、butmio（仏名）などである。

ここで具体的に取り上げてみようと思うものは、「月」の guat（グヮッ）という表記と、開音化して guachi（グヮチ）と表記した例があることである。この両者の表記が、翻字者を見分ける基準になり得るかどうかと思うからである。「月」を含む語で、「正月」から「12月」および「毎月」の guat, guachi のあるページと行をすべて並べることにする。文字囲みは guachi と表記した例で、囲みがないものは、guat の表記である。

（Ⅰ）～（Ⅳ）は、上記の菅原氏の分類によって示してみたものである。Guat 38例、guachi 28例、合計66例を並べてみる。

（Ⅰ）[21-9, 22-24, 29-19], 53-8, [64-5], 72-24, 73-1, [77-17], 77-21, [78-5], 79-20, 84-10,

89-12, 89-16, 93-24, 98-7, 108-12,

（Ⅱ）144-3, 144-16, 147-15, 148-18, 152-14, 180-13, 196-19, 200-7, 211-3, 213-12, 221-12,

（Ⅲ）228-15, 229-11, 234-2, 247-21, 251-23, 280-10, 285-2,

（Ⅳ）298-11, 305-16, 318-3, 318-13, 318-15, 321-10, 322-1, 322-17, 322-19, 324-8, 324-23, 325-16, 325-16, 331-11, 342-2, 348-7, 348-9, 352-19, 357-23, 360-9, 362-16, 363-17, 366-9, 374-19, 377-11, 381-22, 388-21, 393-2, 403-14, 404-21, 407-16

これをみると、（Ⅱ）は guat が多く、（Ⅲ）は guachi が多いとはいえるが、その境目を示すほどではなく、特に（Ⅰ）と（Ⅳ）では混然としていて、翻字者の違いと見るほどの配列とはなっていないと見るべきであろう。また月々の回数は次のとおりである。

| 月 | 正月 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 毎月 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| guat | 2 | 5 | 8 | 2 | 6 | 2 | 5 | 1 | 2 | 3 | 1 | 1 | 0 | 38 |
| guachi | 8 | 1 | 2 | 0 | 3 | 4 | 2 | 2 | 2 | 1 | 0 | 1 | 2 | 28 |

なお、特には触れなかったが、ガ行は ga, gui, gu, gue, go、サ行は sa, xi, su, xe, so タ行は ta, chi, tçu, te, to ハ行は fa, fi, fu, fe, fo などであることは、他の版本と同じである。

以上、表記の基礎的問題として諸点を取り上げた。ただ撥音・促音表記などの外、触れるべき問題も残しているが、これで稿を閉じることにする。

参考文献　橋本進吉著『キリシタン教義の研究』（岩波書店）
森田　武著『天草版平家物語難語句解の研究』（清文堂出版）
森田　武著『日葡辞書提要』（清文堂出版）
土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店）
佐野泰彦著『基礎ポルトガル語』（大学書林）

索引資料としては、江口正弘・溝口博幸編『CD-ROM 版　天草本平家物語資料大成』（尚文出版）を使用した。ただ底本の ſ は印刷の都合で s で印刷した。